HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小規模博物館で活用可能な来館者基礎情報調査ツールの開発に関する実証的な研究～文学館を事例として～[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大西, 慶
Citation	北海道大学. 博士(理学) 甲第15745号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kei_Onishi_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称　博士（理　学）　　氏　名　　大西　慶

学 位 論 文 題 名

小規模博物館で活用可能な来館者基礎情報調査ツールの開発に関する実証的な研究
～文学館を事例として～

日本の博物館は「冬の時代」にある。典型的な日本の博物館は、来館者数が 5,000 人未満で、職員数も限られ、かつ財政面においても厳しい状態である。規制緩和と地方分権の推進により、2008 年の博物館法の改正では、博物館運営に関する評価の努力義務規定が設けられた。博物館評価の項目は多岐にわたり、その実施は簡単ではない。日本博物館の調査より、博物館評価の定着はまだ道半ばにあることが示されている。

このような状況にある日本の博物館のうち、本研究では文学館に焦点を当てる。文学館は日本文学の作品や作家を対象としている。文学館はその機能を、限られた専門家を対象とした図書館的機能から、より一般に開かれた博物館的機能へと移行させつつある。一方で「文学館」の定義は定まっておらず、全国文学館協議会も文学館全体に対する認知の拡大を課題に据えている。加えて文学館を横断的、かつ博物館学的に調査した例はなく、文学館の実態は明らかになっていない。小規模館が大分部を占めるに文学館おいて、自らを評価し自館の意義を発信することは重要であるものの、まずは文学館の来館者について、理解を深める必要がある。

本研究では、このような背景から博物館評価の前段階となる、来館者の基礎情報を調査するツールの開発を開発した。まず来館者の基礎情報を記録する「来館者基礎情報記録ツール」を開発した。これは小規模博物館の受付に設置して、博物館の受付スタッフがタッチパネルで操作して来館者の基礎情報を収集するツールである。ソフトウェア部分はオープンソースソフトウェアとして無料で利用できるプログラミング言語 Python を用いて独自に開発した。同ツールは市立小樽文学館にて博物館の運営の中で実運用し、同館のスタッフと課題を共有しツールの改修を重ねた。同館にて来館者の基礎情報を収集し、その集計結果から来館者層の概要を示すに至った。

次に他の文学館に同様に来館者基礎情報を収集し、館間横断的に集計した。市立小樽文学館を含む 8 館において記録を行い、得られた横断的な集計結果に対して文献調査と各館のスタッフの知見を基に理解を深めた。結果、一部ではあるものの来館者層の形成について、各文学館の特徴と関連付けて解釈が可能であることが確認された。

最後に「来館者基礎情報調査ツール」として、来館者の基礎情報の記録と分析を包括したシステムの開発に取り組んだ。「来館者基礎情報記録ツール」からクラウドに来館者の記録を保存し、クラウド上にウェブサーバを立ち上げてリアルタイムに来館者の基礎情報を閲覧できる構成にした。以上の結果、オープンソースソフトウェアを用いて開発し、実施検証を介して小規模博物館にて運用可能な基礎的な来館者の基礎情報を記録・集計するツールを実現できた。またその基礎情報の分析によってこれまで博物館学的な調査が未開拓であった、文学館についてその来館者層の形成の要因の一部を明らかにした。